

2026.10.11.

「一粒の麦、もし死なずば」

旧約 詩編90編1～17節

新約 ヨハネによる福音書12章20～26節

1. はじめに

ヨハネによる福音書を共に読み進めてまいりまして、先週の「イエス様のエルサレム入城」の記事から受難週に入りました。これ以降に記されている出来事が起きた場所は全てエルサレムです。そして、時期は「過越しの祭り」の時です。この受難週の出来事は、金曜日にイエス様が十字架にかけられる、そして「週の初めの日」つまり日曜日に復活された、そのことに向かって進んでいきます。福音書におけるイエス様の言葉や為された業は、イエス様が誰あるのか、イエス様によって与えられる救いと何なのか、これと無関係に記されているものではありません。ですから、イエス様の言葉も業も十字架と復活の出来事と無関係に理解することは出来ません。そのような理解の仕方では、聖書の言葉を正しく受け止めることは出来ません。まして、受難週の出来事は明確にイエス様の十字架・復活の出来事と結びつけて受け取られなければなりません。そうでなければ、イエス様が語られた言葉の意味は全く分からなくなってしまいます。そのことを弁えて、今朝与えられているみ言葉から神様の御心をしっかり受け取ってまいりたいと思います。

2. (フィリポとアンデレに見る)イエス様の弟子の務め

さて、20～22節「12:20 さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。12:21 彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。12:22 フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。」とあります。どうして「過越しの祭り」のエルサレムにギリシャ人がいたのか？と思われる方もいるでしょう。この人たちは、ユダヤ人ではないけれどユダヤ教に興味・関心がある人と考えてよいでしょう。現代で言えば、まだキリスト者ではないけれど、主の日の礼拝に集っている求道者のような方をイメージすれば良いかと思います。ギリシャ人もユダヤ教を信じ割礼を受ければユダヤ人となります。ユダヤ人とは、ユダヤ民族であるということを意味することもあります。何よりもユダヤ教徒であるということを意味しました。多分、この人たちもイエス様のエルサレム入城の場面に出くわし、イエス様を歓迎している

ユダヤ人たちから、イエス様がラザロを復活させたことなども聞いていたでしょう。それで、彼らはイエス様に会いたいと願った。彼らもイエス様がメシア、キリストであると思ったからでしょう。少なくとも、神様から遣わされた偉大な預言者とは思ったでしょう。そして、なぜか彼らはイエス様の弟子であるフィリポに「イエス様に会いたい」旨を伝えます。フィリポはアンデレに相談し、イエス様に取り次ぎました。

イエス様は王様や身分の高い人のように、取り次ぐ人がいなければ会えないような方ではありませんでした。しかし、この時のギリシャ人たちは、イエス様の弟子を通すというなんともまだるっこい手続きをもってイエス様会うことを求めました。ここには、二つのことが暗示されていると思います。一つは、イエス様の弟子たちの務め、役割です。それは、イエス様の弟子たる者は、イエス様を求める人たちをイエス様の身許に連れていく務めがあるということです。これを伝道と言っても良いでしょう。フィリポとアンデレは、彼らにイエス様はこういう方だと教えたわけではありません。ただ、イエス様に会いたい人がいるとイエス様に伝えただけです。そして、イエス様は言葉を与えました。イエス様が語られる言葉がその人に伝わること、それが大切なのでしょう。もう一つ、それはギリシャ人に対しても、つまり異邦人に対してもイエス様の救いの道は開かれているということです。このことは、後にパウロによる異邦人伝道という形で明らかになりますけれど、イエス様自身、この時すでにご自分の救いの広さ、ユダヤ人の枠を超えて与えられる救いの広さというものはっきり自覚されていたということです。

3. 人の子が栄光を受けるとき

イエス様はご自身が与えられる救いについて、23 節以下において告げられています。まず「**人の子が栄光を受ける時が来た。**」と告げられました。今まで、イエス様は「**わたしの時はまだ来っていない**」と告げきました。2 章 4 節、カナの婚礼において水をぶどう酒に変えられた時。7 章 6・8 節、イエス様の兄弟たちに「自分を世にはっきり示しなさい」と言われたとき。8 章 20 節、神殿の境内で捕えられそうになった時などに、「**わたしの時はまだ来っていない**」繰り返し告げられました。「わたしの時」とは「人の子が栄光を受ける時」のことです。人の子、つまりイエス様が栄光を受けるとは、イエス様が神の御子としての姿を現される、神様から栄光を受けるという意味です。それは、私共が「栄光を受ける時」という言葉でイメージする時とは全く違っていました。私共がイメージする「栄光を受ける時」とは、先日ノーベル賞を日本人が受けましたが、彼は人々から賞賛を受け、人々から栄光を受けました。しかし、イエス様が「栄光を受ける時」と告げられた

のは、人々から栄光を受ける時ではありませんでした。それは神様から栄光を受ける時であり、イエス様が神の子・メシア・キリストとして明らかになる時でした。それは、神の御子・キリストとしての即位の時と受け止めてもよいでしょう。そしてその時は、イエス様が人々からあざけられ、嘲笑を受ける時でした。それはイエス様が十字架にお架かりなる時であり、復活される時でした。イエス様は、「その時が遂に来た」と告げたのです。この時はイエス様がお決めになった時ではありませんでした。父なる神様が、永遠の救いのご計画の中でお定めになっておられた時でした。その時が遂に来ました。イエス様はこの時、既にこの受難週において起きる出来事をはっきりと見据えておられました。そして、それを御心として受け止め、覚悟してられたということです。それは、この後につく言葉においてははっきりします。

4. 一粒の麦:イエス様

24 節「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」とイエス様は告げられました。とても有名な言葉です。ここから自分たちの教会の名前をとった教会が幾つもあります。わたしが知っている教会だけでも一つの麦と書いて「〇〇一麦教会」、あるいは一つの粒と書いて「〇〇一粒教会」という教会があります。この「一粒の麦」とは、イエス様ご自身を指しています。麦が地面に落ちて、そのまま麦の形であるならば、その麦はどこまでも一粒の麦のままです。しかし、一粒の麦が地面に根を張り、芽を出し、元の麦の形を失うならば、麦の実が茎をのび、葉を茂らせ、遂にはそこに麦の穂が実ります。イエス様はたくさんの麦の実になると告げられました。つまり、イエス様が十字架の上で命を失うならば、イエス様は復活の命へとつながり、そのことによってイエス様の命、復活の命、永遠の命に結ばれる多くの者たちが生まれることになるということをイエス様は告げられたわけです。イエス様の十字架の死は犠牲です。イエス様が私どもの一切の罪の裁きを十字架の上でお受けになることによって、イエス様を信じる者は既に神様の裁きを受けた者とされ、私共は救いに与る事になったわけです。罪人にすぎない私共、ただ滅びるしかない私共が、神様に向かって「父よ」と呼びまづることを許され、父なる神様との親しい交わりに生きる者としていただきました。その恵みの中で私共は、今朝もこのように主の日の礼拝を捧げることが許されているわけです。

5. 一粒の麦:イエス様の弟子

さて、「一粒の麦」はイエス様ご自身であることを見ました。しかし、イエス様が告げられたこ

とは、それにとどまりません。それは、イエス様の命と一つにされ、復活の命・永遠の命を受けた者もまたイエス様の歩みと重ね合わされることになるからです。この一粒の麦の始まりはイエス様ご自身ですが、このイエス様の命の実りとされた者、それはイエス様の弟子たちであり、イエス様に従う者であります。これもまた一粒の麦としての歩みをする者となるということです。

イエス様は続けてこう告げられました。25 節「**自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。**」「**自分の命を愛する者**」とは、自分の願いや思いを第一として、それを叶え、それを手に入れることを第一とする者ということです。それは、イエス様と出会う前の私共の姿であり、イエス様の救いを知らなかった時の私どもの姿です。神様の栄光ではなく、自分の栄光をだけを求めている私どものことです。自分の損得や自分が重んじられることにばかり関心があり、そこに自分の思いの全てを注いでいた私共でした。しかし、イエス様に出会い、イエス様の救いに与り、本当に大切なことはそのようなことではないことを知りました。わたしの栄光ではなく、神様の栄光が現れることこそ何より大切であり、価値があり、喜びであることを知りました。そこで私共は変えられました。新しい命に生きる者に変えられました。自分の生きる喜びも目的も変えられました。この変えられた者をキリスト者と言います。その歩みは献身者としての歩みとなります。イエス様はそのような者を「**この世で自分の命を憎む人**」と告げられました。勿論、私共は自分の命を憎んでなんていません。神様が与えてくださった命ですから、大切にします。病気になれば病院にも行きますし、薬もちゃんと飲みます。しかし、私共はこの地上での命がすべてではないということを知っている者として生きます。自分の損得にばかり心向けるような歩みはやめました。何故なら、イエス様がそのように歩まれたからです。イエス様という一粒の麦が豊かな実りをつけられ、私共は一人一人がその実りの一粒一粒となりました。土に埋められ、根をはやし、芽を出し、成長して実を付けた麦の穂、この麦の一粒一粒は最初に土に埋められた麦と同じ麦の実となるはずですが、麦を植えたのに、米になることはありません。ここに、私共とイエス様の関係があります。イエス様の救いに与った者は、イエス様と同じ命につながります。それは、イエス様の歩みに重ね合わせるようにして生きる者になるということです。そして、そのような者は「**永遠の命に至る**」とイエス様は約束してくださいました。このイエス様の約束と共に生きる者とされた私共です。なんとありがたいことでしょう。今日は聖餐に与りますけれど、この聖餐は「わたしの命がイエス様の命と一つに結ばれている」という、救いの現実を指し示しています。

6. イエス様と共に

わたしは説教の中で、また祈りの中で「あなた様を愛し、信頼し、お従いする者となりますように」と良く言います。イエス様・神様を「愛すること」「信頼すること」「従うこと」は分けることが出来ないからです。イエス様・神様を愛する、信頼するということは、神様・イエス様に「お従いする」ということを抜きにはあり得ません。私共はわが主、わが神としてイエス様を信じ、愛しているのですから、イエス様の御心にお従いすることを私共は喜びとします。喜んでイエス様にお従いするわけです。嫌々従うのではありません。喜んで従います。ここが大切なところです。

以前にもお話したと思いますが、私が 20 歳で洗礼を受けたころ、わたしは十戒が好きになれませんでした。何か上から「〇〇してはならない」と押し付けられているようで、何となく嫌でした。しかし、神学校で生活していく中で、十戒が神様のわたしへの愛の言葉として聞こえるようになりました。父なる神様が、わたしを愛してくださり、「そっちに行ったら崖があつて危ないから、行っちゃだめだよ」とヨチヨチ歩きの幼子に教えている、父なる神様の言葉として聞こえるようになったからです。それから私は、この十戒に対して嫌々ではなくて、喜んで従うようになりました。神様の言葉に喜んで従う。それは、神様を愛し、神様を信頼している者にしか出来ません。これがキリスト者の大きな特徴です。

イエス様は更に「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。」と告げられました。イエス様にお従いして、イエス様に仕えていくなれば、イエス様はその者と共にいてくださると約束してくださいました。イエス様が共にいてくださるというのは、そのように私共が感じるというようなことではなくて、イエス様の約束なのです。イエス様に従って、イエス様の御業にお仕えするならば、イエス様は私共と共にいてくださいます。私共が好き勝手なことをして、神様のみ心などそっちのけで、自分の栄光を求めて、「でも私はキリスト者だからイエス様が共にいて守ってください」というのは、あまりに虫のいい話です。少しも神様を畏れない、我儘な信仰でしょう。私がいるところにイエス様がいてくれるのではなくて、イエス様が居るところに私共がいるようになるのです。イエス様を愛し、信頼し、お従いすることがセットになっているのが、私どもの信仰のあり様だからです。

7. わたしに仕える者を父は大切にしてください

そしてイエス様は、更に「わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」と約束してくださいました。天地を造られた神様が、私共を大切にしてくださいるのですから、私共は

何も恐れることはありません。使徒パウロは同じことを「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」（ローマ 8:31）と告げた通りです。父なる神様が私どもの味方であり、父なる神様が私共を大切にしてくださるのです。

先ほどお読みしました詩編 90 編の詩人は、自分たちが神様によって命を与えられ、神様はそのすべてをご支配されていることを歌いました。そして、自らの地上の命のはかなさを知っていました。「90:4 千年といえども御目には／昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。あなたは眠りの中に人を漂わせ／朝が来れば、人は草のように移ろいます。 90:6 朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい／夕べにはしおれ、枯れて行きます。…… 90:10 人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。」身につまされます。しかし、その詩人が最後に「 90:17 わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにしてください。」と歌います。神様の喜びが私の喜びとなる。そして、神様の御手の中でこそ、私どもの為す業が意味を持ち、空しくならない、神様の御手の中にある確かさを知っていました。私どもの命も同じです。イエス様によって救われた私どもの命は、イエス様を愛し、信頼し、お従いする歩みによって永遠の命へと至ることになります。その歩みと共に、イエス様が私共と共にいたくださいます。父なる神様が私共を大切なものとしてくださるからです。この大いなる安心の中に生かされていることを心から感謝し、共に聖名をほめたたえたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

あなた様は私共を愛してくださり、私共があなた様の子・僕として永遠の命に至るようにと、愛する独り子イエス様を与えてくださいました。イエス様の尊い血潮によって一切の罪を贖われた私共です。イエス様の命と一つに結ばれた者として、ただあなた様の御心になること、あなた様の救いのご計画が実現していくことを、何よりも喜び、そのためにあなた様によって与えられている賜物を捧げて、御国に向かって健やかに歩む者であらしめてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン